

SSI 学会誌編集委員会 2015 年度第 2 回委員会 議事録

日時：2015 年 9 月 13 日（日）16:15～17:45

場所：明治大学駿河台キャンパス・リバティタワー15階 1154

出席者：

北村順生[委員長]（新潟大学）、遠藤薫[副委員長]（学習院大学）、櫻井成一朗[副委員長、英文誌主任]（明治学院大学）、河又貴洋[副委員長]（長崎県立大学）、（以下 50 音順）、伊藤賢一（群馬大学）、今田寛典（広島文化学園大学）、岩井淳（群馬大学）、大國充彦（札幌学院大学）、小笠原盛浩[Skype 参加]（関西大学）、岡田安功（静岡大学）、北村智（東京経済大学）、金相美（名古屋大学）、松本早野香（大妻女子大学）、吉田寛（静岡大学）

欠席者(敬称略)：

岡田勇[論文受付・査読管理担当]（創価大学）、河井延晃（実践女子大学）、五藤寿樹（開智国際大学）、後藤玲子（茨城大学）、柴田邦臣（津田塾大学）、松下慶太（実践女子大学）、関谷直也（東京大学）、服部哲[ネットワーク担当]（駒澤大学）、中森弘道（日本大学）、野田哲夫（島根大学）、森田均（長崎県立大学）、山本佳世子（電気通信大学）、山本仁志（立正大学）、吉田純（京都大学）

（文責：河又）

【報告事項】

1. 学会誌発行予定

- 第 4 巻 1 号（2015 年 9 月末発行予定）担当：森田均委員・北村順生委員
→査読状況：掲載決定 6 本有り（別紙 2）
- 英文誌 8 号（2015 年 9 月末発行予定）担当：桜井成一朗委員・金相美委員
→掲載決定 1 本、査読中 1 本、和文英訳論文については「初出 (first published date)」と「翻訳 (translation)」を明記—掲載方法については編集長と協議の上、要検討。なお、翻訳にあたっては注釈や参考文献等の追加・変更は認める（編集長の桜井委員に確認要）

2. 本学会大会における学会誌原稿の勧誘・依頼

（1）研究発表関連

- ・研究発表優秀賞受賞者に対して、推薦論文の原稿執筆を依頼する。
- ・学会大会自由論題の司会・コメンテーターに対して、研究発表賞とは別に、メールで優秀な発表者を推薦してもらい、編集委員会から原稿投稿を依頼・勧誘する。

（2）シンポジウム・ワークショップ関連

- ・学会大会のシンポジウム報告、ワークショップ報告の原稿を依頼する。
→第 4 巻 3 号を目途に

【審議事項】

1. 前回議事録確認

- ・ 前回 2015 年度第 1 回編集委員会（2015 年 6 月 7 日）の議事録確認（別紙 1）

2. 2015 年度学会誌編集委員会の体制について

- ・ 2015 年度学会誌編集委員会の体制確認（別紙 3）

3. 今後の和文雑誌編集長

- ・ 従来のように各号の編集長が 2 名とも 1 号ずつで交代するのではなく、編集長の任期を 2 号分にして、順繰りに 1 名ずつ交代する（各号で、1 名は継続、1 名は新規となるので、作業内容の引き継ぎがスムーズになる）。

→ なお、編集長を 2 期務めるとなると、担当者は投稿機会を失うのではないかとの疑念が出されたが、編集長 2 名体制により二重盲査読（double-blind peer review）を確保することが確認された。

○第 4 巻 2 号（2015 年 12 月末発行予定）：編集長＝森田委員＋松本委員

○第 4 巻 3 号（2016 年 3 月末発行予定）：編集長＝松本委員＋（柴田委員：承諾要）

○第 5 巻 1 号（2016 年 6 月発行予定）：編集長＝（柴田委員：承諾要）＋（新任委員 A）

○第 5 巻 2 号（2016 年 12 月発行予定）：編集長＝（新任委員 A）＋（新任委員 B）

○第 5 巻 3 号（2017 年 3 月発行予定）：編集長＝（新任委員 B）＋（新任委員 C）

4. 次号の英文雑誌編集長

○英文誌 9 号（2016 年 9 月発行予定）→ 担当：伊藤賢一委員＋河又委員、なお、早々に CFP（Call for paper：締め切りを 11 月 30 日として）のネット公示を桜井広報委員に依頼した。

5. 今後の企画について

（1）特集論文

既に決定済みの特集に関して、掲載予定号および原稿締切日を以下のように変更した。また、特集論文については、査読者（1 名のみ）による査読を行うこと、査読者は編集長と相談の上、北村委員長より依頼することが承認された。

○特集「選挙」：

第 4 巻 3 号（2016 年 3 月末発行予定）掲載予定。原稿締切：2015 年 9 月末

担当：橋元会長

著者：清原聖子会員（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

吉見憲二会員（仏教大学社会学部現代社会学科講師）

河井大介会員（東京大学大学院情報学環助教）

→ 査読：査読者（1 名のみ）による査読を行う。査読者は編集長と相談の上、北村委員長より依頼。以下、特集論文の査読については同様の対応をとる。

○特集「世論」：

第 5 巻 1 号（2016 年 6 月末発行予定）掲載目標。原稿締切：2016 年 3 月末。

原稿依頼：遠藤副委員長。

○特集「メディア」:

第5巻2号(2016年12月末発行予定)掲載目標。原稿締切：2016年9月末。

原稿依頼：橋元委員長。

○特集「ジェンダー」:

第5巻2号(2017年3月)掲載目標。原稿締切：2016年12月末。

原稿依頼：金委員。

(2) その他の掲載予定原稿

○第4巻1号(2015年9月末発行予定):

- ・第5回横幹総合シンポジウム報告(2014年11月29~30日)

→遠藤委員が原稿取りまとめ(2015年9月16日に北村委員長に提出済み)

○第4巻2号(2015年12月末):

- ・総会シンポジウム報告(2015年6月7日):田中秀幸会員が原稿取りまとめ予定(原稿締切2015年9月末)
- ・学会賞受賞報告(優秀文献賞、学位論文賞、研究発表優秀賞、など)

○第4巻3号(2016年3月末)

- ・第5回横幹連合総合カンファレンス報告(遠藤委員)

- ・学会大会シンポジウム報告、ワークショップ報告(原稿締切2015年12月末)

→シンポジウムについては、テープ起こし後原稿チェックを原則、発表者に依頼する(松原仁(はこだて未来大学)および鈴木宏昭(青山学院大学)の報告分については櫻井副委員長が担当できるとのことであるが、西川アサキ(早稲田大学)については直接本人に原稿チェックを依頼する)

- ・公開シンポジウム「社会情報学の〈これから〉～若手研究者からの発言」報告(2015年7月4日):吉田寛委員担当
- ・若手カンファレンス報告(2015年9月11日):服部委員担当

○英文誌9号(2016年9月発行予定)

- ・翻訳論文:過去の和文誌(旧 JASI・JSIS 学会誌を含む)に掲載された和文論文を著者責任の上で英訳したものを採録する。(英文誌8号で開始したものを、継続する。)
- ・シンポジウム報告等も含むか?→「含めてよし、過去に掲載事例有り」
- ・英文読者向けに注や文献表の追加は認めるか?→「認める。但し、その旨を明記」

6. 学会誌の電子的取り扱いについて(北村智委員)

J-STAGE サービス方針説明会(2015.7)の説明

→J-STAGE サービスの活用は、本学会論文へのアクセシビリティを高める上で必須であるため、編集委員会としては活用を進めていく方向で承認した。登録申請は9月27日に開始されるが、12月12日(土)の理事会に諮り、承認され次第、早急に対応する。なお、登録申請に当たっては、XML方式での登載が必要であり、ある業者に委託した場合1本あたり2,500円で、SSIからの掲載論文数を40本と考えれば、予算立ても可能であろうとの意見もあるが、今後正式な見積もりを含め審議のための

資料作成を北村智委員が担当する。

なお、これまでの CiNii 掲載の論文については Digital Object Identifier(デジタルオブジェクト識別子:DOI)は確保されるとのことであり、J-STAGE への移行に際し、掲載されない論文については、学会誌発行主体の負担により XML 変換を行う必要があるとのこと。

資料掲載ページ<https://www.jstage.jst.go.jp/pub/html/AY04S560_ja.html#150724>

7. 学会誌編集作業の改善に関わる諸問題

(1) 査読期間の短縮化（前回編集委員会から継続審議）

- ・査読者数を 2 名に変更し、片方が不採択の判定の場合のみ 3 人目の査読者を立てる形はどうか？ 査読期間の短縮化につなげることが目的。
- ・一方で、「多数決原理」で審査を行っている現状もある。
 - 3 名の査読者選定に苦慮し時間をとられることを考えると、査読者数を 2 名とする提案にも一理あり、国際学会のなかにもそのような方式をとっているところもある。今後、編集委員会内に本件に係わる WG を組織し、そこで他学会の査読体制を調査し検討していくこととする。WG のメンバーについては北村委員長に一任する。

(2) 学会誌の評価向上（前回編集委員会から継続審議）

- ・学会誌の審査付き論文には、受付日、採択日を必ず記載する。
 - 記載することが承認された。なお、記載書式（レイアウト）については、次号第 4 巻 1 号の編集長が原案を作り、編集委員会に諮るものとする。

(3) 審査料、掲載料の導入（前回編集委員会から継続審議）

- ・理工系の学会では指導教員が共著者のため、指導教員が支払うので導入可能ですが、SSI では投稿数が増えてからのの方が良いかもしれません。
 - 時期尚早であるとして、導入は見送られた。(投稿数が多ければ検討の余地はあるが、現在の投稿数の状況を見る限り、審査・掲載料の導入によりさらに投稿数が減少する可能性あり。)

【次回編集委員会予定】

2015 年 12 月 12 日（土）、於：東京大学（予定）

以上